

初唐における智通訳の観音経類が意味するもの

村上真完

要旨: いま観音・觀世音等の用例を歴史的に辿ると、漢訳では観音 (Avalokita-svara, 闕音*¹, 見音声*²光世音*³, 觀世音*⁴, 觀音*⁵) から觀世自在*⁶, 觀自在*⁷ (Avalokiteśvara < Avalokita-īśvara) へと変遷した。初唐に智通が譯したこの經は、Avalokiteśvara を観音と表記した陀羅尼神呪經である。この段階で觀世音 (又は觀音) が信仰の対象として確立し今日に至る。玄奘 (600?-664) が玉門關から伊吾 (ハミ) までの砂漠を通る間、生命の危機に直面し、ひたすら觀音菩薩を念じて進み生き延びたという。しかし玄奘は、西北インド (現在のパキスタン北部のスワート地方) において、觀自在菩薩が正しく、觀世音などは誤り (訛) であると知って改めた。しかし觀世音 (觀音) の信仰が唐代に廃れなかったことは、初唐 (武徳 - 貞觀年間618-49) の智通譯の「千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經」が物語っている。玄奘以降に觀自在菩薩の呼稱も流布したが、觀自在菩薩への信仰は漢字文化圏では、今日まであまり有力にはならなかったようである。

0 観音をめぐる諸研究と諸問題：研究文献

フロリダ博物館所蔵の最初期のガンダーラ仏阿彌陀三尊 (実は向かって左の勢至像を欠落した2尊) のモノクロ寫真の半跏で思惟する觀音像とそのカラーシュティ銘文: Oloiśpare は、Avalokiteśvare (觀自在) を予想させると私は確認した (Murakami, Shinkan 2008, Early Buddhist Openness and Mahāyāna Buddhism, *Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism Sambhāṣā* 27, 2008, pp.109-147).

^故辛嶋静志教授は漢譯佛典の觀音に関する資料を廣く發掘し整理し、法華經梵本のホータン寫本斷片や、別の中央アジア寫本に avalokitasvara とある8例を挙げる (Seishi Karashima 2017, On Avalokitasvara and Avalokiteśvara, 『創価大学国際仏教学高等研究所年報平成28年度 (第20号)』 Annual Report of The International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University for the Academic Year 2016, pp.139-165).

齊藤明教授「観音（観自在）と『観音経』：鳩摩羅什訳の謎をめぐって」『伊藤瑞叡博士古稀記念論文集法華文化と関係諸文化の研究』, 2013.2, pp.179-189は Avalokiteśvara 起原を唱え, 2019年9月：日本印度学仏教学会で同論題を掲げた。

宮治昭 2018『中央アジア仏教美術の研究—釈迦・弥勒・阿弥陀信仰の美術の生成を中心に—』は, モノクロ縮小版ながら豊富で有用な図版を公開した報告書である。

水谷真定 1971訳『大唐西域記』（中国古典文学大系22, 平凡社）は, 分かりやすい現代語訳で, 考古学・歴史学・言語学的註記に富み, 有用である。

本神呪経の梵文復元：Mr. Chua Boon Tuan(蔡文端)：1986 Transliteration, Rawang Buddhist Association(萬撓佛教會) Transliterated in the year 1986.8, Jalan Maxwell, 48000 Rawang, Selangor, West Malaysia¹. <https://www.dharanipitaka.net/MBodhisattva/Aryavalokitesvara-mata.pdf>.

1 観音の漢訳語とその原語の問題

蓋（又は廬）樓亘から観自在までの漢訳の諸例（辛嶋論文で出典を確認）

0 蓋（呉音：ガフ, 漢音：カフ, 慣用音：ガイ；これは観音の原語には不適合）。（宋・元・明の三本：廬（アフ, カフ, ガフ）・樓（呉音：ル, 漢音：ロウ）・亘（呉音：セン, コウ, 漢音：セン, カン）> アプロウセン：<辛嶋説：Eastern Chinese（東＝前漢シナ語）：？ ap lou sjwan > Middle Chinese（中世シナ語）：？ ap lou sjwän <『佛説阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經』卷上, 吳月支國居士支謙譯：下記の辛嶋2016, p.141は支婁迦讖譯とする：T.12. no.362, p.308b15-16, 21; p.309a15.

i 闍音（音声を窺うお方）< Avalokita-svara：『法鏡經』後漢安息國騎都尉安玄譯（元・明本では嚴佛調との共譯）闍音開士（T.12. no.322, p.15b5）。『佛説維摩詰經』卷上 支謙譯 闍音菩薩（T.14. no.474, pp.519b16）

ii 現音聲（音声を現すお方）< Avalokita-svara：『放光般若經卷』第一 西晉于闐國三藏無羅譯（宋・元・明三本に三藏無羅叉共竺叔蘭譯, T.8. no.221,

1 漢字表記では蔡文端居士羅馬拼音翻成：佛圓居士整編。これは明本「千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神咒經」の神咒の梵文復元版（漢梵対照版）である。出版地である西マレーシアのセラングル(Selangor)[州]のラワンク[市]は, 首都クワラルンプル(Kuala Lumpur)の西北に接する州の工業の盛んな都市という (<https://en.wikipedia>)。

p.1b3)

- iii 光世音（世間の音聲を照らし知るお方）＜Avalokita-svara 竺法護譯『正法華經』巻一「光瑞品第一」巻十「光世音普門品」光世音菩薩：T.9. no.263, pp.63a25, 128c-129c)
- iv 觀世音（世の中の音聲を思い考えるお方）＜Avalokita-svara. 鳩摩羅什譯『妙法蓮華經』巻一「序品第一」, 巻七「觀世音菩薩普門品第二十五」, T.9. no.262, pp.2a8, 56c2-58b. この影響は非常に大きい。觀音と併用されている。
- v 觀音（音聲を思い考えるお方）＜Avalokita-svara 觀世音と併用される。上記の「普門品」には、特に觀音力という超能力をもって衆生の危機を救う菩薩。衆生は危機に際しては、その觀音力を心に念ずること（念彼觀音力）によって危機を脱すると、繰り返し説かれている。
- vi (a) 觀世自在菩薩（世間を觀ること自在なお方）＜Avalokita-īśvara. 元魏婆羅門瞿曇般若流支譯「得無垢女經」T.12. No.339. 97c27；高齊天竺三藏那連提耶舍譯「大方等大集經」巻第五十一, 「月藏分第十四諸惡鬼神得敬信品」T.13. No.397. 340a22; 「不必定入定入印經」T.15. No.645.699b29; 元魏天竺三藏菩提流支譯「勝思惟梵天所問經」巻第一 T.15. 587.81a1; 「深密解脫經」巻第四 T.16.No.675.680a18; 「無字寶篋經」T.17. No.828.871a12; 隨天竺三藏闍那崛多譯「觀察諸法行經」巻第一 T.15. No.649.727c2；元魏天竺三藏佛陀扇多譯「如來師子吼經」T.17. No.835.890a19.
- (b) 觀世自在如來：元魏天竺三藏菩提流支譯「謗佛經」T.17. No.831.876c5.
- vii 觀自在（思い考えること自由自在であるお方：Avalokiteśvara<Avalokita-īśvara）。この觀自在菩薩という名称は、玄奘 [大慈恩寺] 三蔵がインド往復の15年5箇月間の大旅行の過程で、玄奘自身が訳語を確定し納得したのである。玄奘以降の唐代以降においては、觀自在菩薩という訳語が世間において定着した。しかし、觀音、觀世音と称えることが廢れたことは、唐代以降においても無かったといつてよい。

2 觀音・觀自在菩薩の故郷はどこか。

- a 玄奘による伝承 ^{うじょうなこく} 烏仗那國（現在のパキスタン北方の辺境ウドゥヤーナ：Udyāna 地方、即ちスワート：Swat 地方）の中心 ^{もつうけり} 耆揭釐城（今のミンゴラ

Mingora 市)の東北三十餘里(約15km)に遏部多(adbhuta 唐言:漢語で奇特:珍しい)という処に高さ四十餘尺(約120m.)もあって、人々の崇敬を承けていた石の塔(窣堵波)があり、そこから西に大河を渡って三四十里(15-20km.)行くと一精舎があり、その中の阿縛盧枳低濕伐羅あばろーきていしゆばら(Avalokiteśvara 菩薩像)が人々の崇敬・供養を受けている。唐言(漢語)は觀自在。阿縛盧枳多(avalokita)は譯して觀という。從來譯して觀光世音、觀世音、觀世自在というは皆訛謬である、と断定した(『大唐西域記』卷三, T.51, 883b21-24)。

玄奘のこの伝承に関して、この四十餘尺の石の塔というのは、私が1982年8月と2004年7月とに見てきた限りでは、今もミンゴラの僅かに南東で、スワート川の下流左岸にあるプトカラの大塔であって、イタリアの考古学者が前世紀後半の初めに発掘したものであろう(水谷真定1971『大唐西域記』p.100; D.Faccena, A Guide to the Excavation in Swat (Pakistan) 1956-62, 1962, Rome 参照)。それより西南10km, 下流沿いのシンゲンデル(Shingender)の塔は、玄奘が「嘗揭釐城の西南に行くこと六七十里にて大河の東に窣堵波有り。高さ六十餘尺。上軍王之建つる所也(T.51. p.883b3-4)と述べており、水谷『大唐西域記』p.107の註記の通りなことは私も確認できた。

b 玄奘の旅行の最初期は觀音信仰: 觀音を念じて命懸けて危機を乗り越えた。

『大唐西域記』は西域からインドに亘る地誌であって、旅行記の方は殆ど二次的になっている。その旅行記は、玄奘没後に纏められた二本がある。最初に出来たのが、「大唐大慈恩寺三藏法師傳」(T.50. No.2053, pp.220c-280a)で、垂拱四年三月十五日(688CE)の日付で「仰上沙門釋彦棕述」という序を冠し、本文は「沙門慧立本 譯彦棕箋」とある。慧立が本文を書き、彦棕が翻訳し註記を加えたといひ「慈恩傳」と略称される、玄奘の生涯を描いた十卷本である。もう一本の「大唐故三藏玄奘法師行狀一卷」(T.50. No.2052, pp.214a-220b)は、「明徳二年八月日、感得_レ此記_ニ冥詳撰」という1卷本である。明徳二年は唐の滅亡後に興った蜀の年号で934CEに相当する。両伝とも一致して玄奘が敦煌の西方の玉門関から伊吾(ハミ)までの砂漠を騎馬で通る間では、生命の危機に直面し、ひたすら觀音菩薩を念じて前進して生き延びた経緯を語る。両本とも水を入れた重い皮袋を砂上に落として水を全て失ったという。一卷本ではその前に第一烽[火台]で箭を射かけられたという。十卷本では水を失ってから、一旦は十里(5km.)引き返したが、思い返して砂漠を進んだという。伊吾で

は高昌王麴文泰の使人（使者）が来ており、やがて麴文泰の後援を得て、大旅行が叶う。その時には観自在菩薩は玄奘の念頭にはないであろう。麴文泰は玄奘が印度を旅行している間に唐の軍勢に攻められて死んだという。玄奘はその5年後の貞観19年正月（645CE頃）に唐の都：長安に帰ったというが、高昌のあった北道を通らずに、ホータン（Khotan, 于闐）などタクラマカン砂漠の南を通る南道を経ている。玄奘は地理を広く探究しようとしている。

玄奘は長安に帰ってからは、大翻訳家として休むことなく働き、麟徳元年2月（664CE）に、数えの65歳（或いは63歳）に亡くなったという。

3 千眼千臂観世音菩薩陀羅尼神呪經解題

使用した漢字大藏經(*T. vol. 20, No. 1057*以下. *T.*は『大正新脩大藏經』, 昭和3(1928): 宋・元・明・麗の4本の外に写本と木版本に基づいた活版印刷。その電子版(CBETA, 2000)は不備もあるが便利で本稿もその頁と行数に従う。その誤記は訂正し、誤訳は避けたい。)

使用参照した電子版諸資料

- 1 千眼千臂観世音菩薩陀羅尼神呪 Avalokiteśvara-mātā Dhāraṇī Āryāvalokiteśvara-mātā-dhāraṇī 千眼千臂観世音菩薩陀羅尼神呪 www.dharanipitaka.net/.../aryavalokitesvara-mata.pdf. (Transliterated in the year 1986 from volume 20th serial No. 1057 of the Taisho Tripitaka by Mr. Chua Boon Tuan (蔡文端) of Rawang Buddhist Association (萬撓佛 教會), 蔡文端居士羅馬拼音翻成: 佛圓居士整編。蔡文端・佛圓編: ローマ字本 (=「蔡…」と略), 括弧内に註。
 - 2 蔡文端居士羅馬拼音翻成: 圓居士整編。明本「千眼千臂観世音菩薩陀羅尼神呪」²の梵文復元版(漢字とローマ字とによる漢梵対照版)。即ち蔡文端・佛圓編対照版(つぶさには千眼千臂観世音菩薩陀羅尼神呪 Avalokiteśvara-mātā Dhāraṇī Āryāvalokiteśvara-mātā-dhāraṇī 千眼千臂観世音菩薩陀羅尼神呪 … www.dharanipitaka.net/.../aryavalokitesvara-mata.pdf (「蔡b版」と略記)がある。
 - 3 *T.1057a* 千眼千臂観世音菩薩陀羅尼神呪經卷上 / 篇章 CBETA 線上閲讀 cbetaonline.dila.edu.tw/T20n1057ap0088a27 「cbetaonline.dila.edu.tw/ (線上閲讀)」(2019.04.30～発見閲覽)。巻初から梵字・ローマ字転写(「梵口」と略記)
-
- 2 *T.vol.20*: 密教部三は「呪」に統一しているが、パソコンでは咒が出ることも多い。

を含み、梵字とそのローマ字化に稀ながら誤りが混っている³。

- 4 T.20. No.1057の明本 (b 本) は多くの異読の註記があつて精査するのは難しい。「梵口」には数種のローマ字が当てられている所もあつて、原型を確かめ難い箇所もある。以上は煩瑣ながら、そのまま使用するが、少なくとも反切や異読を考慮すべく、反切を記している SBETA 版の大正新修大藏経だけではなく、原活版印刷本 (T.20) で確かめた。蔡文端は T. Vol.20, No.1057 (麗本 = a 本) を顧みないが、私はその梵字悉曇文等とも照合してみる。蔡文端還元本には明本より簡潔な麗本 (A) の同陀羅尼神呪と合致しない箇所もあるが、意味上はほぼ一致する。

4 千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經 (陀羅尼) T.20, 90a12ff.[b 本 = 明本]和訳

Avalokiteśvara-mātā Dhāraṇī 蔡文端 (Mr. Chua Boon Tuan) 対照版参照。千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經 T.20. No.1057 [a 本 = 麗本] 大唐總持寺沙門智通譯参照⁴。私 (村上) の和訳は右端のスラッシュ (/) 以下に限る。

Avalokiteśvara-mātā Dhāraṇī (蔡) / 觀自在 [菩] 母陀羅尼
T.20. 89b28 nama (蔡-ah) sarva-jñāya namo ratna-trayāya namaḥ (蔡-o)

/ 一切知者に歸命。

90b22 那麼 薩囉婆若耶 (一) 娜謨 喝囉怛那 多羅夜也 (二) 娜

/ 仏法僧の三寶に歸命。

3 また省略記号 (邦語で用いる「々」や「く」にも相当する繰り返し省略記号: ㄩ) にも注意を要する。本稿はその省略記号を用いず、同語を繰り返すだけにする。

4 以下において最初のローマ字で表記されているのは、a 本 = 麗本の末尾に示されている梵字 (悉曇文) 表記 (T.89b28-90a10) のローマ字表記である。この梵字表記は誤記や不統一もあり、仏教混交 (Hybrid) サンスクリットに属する。蔡氏は正規のサンスクリット文を志向して訂正し、独特の節をつけた誦経を放送している。次の行の漢字表記は、「千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經 T.20, 90 b 21-91a25 [b 本 = 明本] の根本大神呪の反切による漢字表記である。本来なら、最初のローマ字表記の梵文と同じ発音でなければならないが、必ずしも、そうはなっていない。そこで a 本 = 麗本の反切表記をも参照しながら、筆者なりに真言の本文を改訂して、その邦訳を試み、右端に表示した。なおこの根本大神呪と称する梵文の後半部は、反復を多く繰り返し、また意味も明瞭には辿り難いように思える。この後の散文で最も理解困難なところは、左右の五指の一々・掌・手・腕の動作 (印契・印相) 等からなる五体全身を用いて行う動作 (行業) の説明の文である。私の全身で再現したいが理解も表現も及ばない。蔡氏の還元版はそんな箇所は全て避けている。

- Amitābhāya Tathāgatāyārhatē [sa- / 無量光(阿彌陀)・如来・
- b29 23- 謨阿弭陀婆耶但他揭多耶(三)阿囉訶羝 / 應供(阿羅漢)・
- c1 myak-saṃbuddhāya Namaḥ(蔡-a) Āryāvalokiteśva- / 正等覺者に歸命。
- b24- 藐 三菩陀耶(四)娜謨 阿唎耶跋路枳帝(五)濕嚩
/ 聖觀自在菩薩⁵・
- c2 rāya Bodhisatvāya(蔡-ttvāya) Mahāsattvāya mahā- / 摩訶薩・大悲者に
- b25- 囉耶(六)菩提薩埵耶(七)摩訶薩埵耶(八)摩訶迦嚩尼迦耶(九)
/ 歸命。
- c3 kāro(蔡-u) ṅikāya Namaḥ(蔡-o) Mahā-sthāma-praptāya / 大勢至菩薩・
- b26-7 娜謨摩訶薩他摩波羅鉢多耶(十)菩提薩埵耶(十一)摩訶薩埵耶
(十二) / 摩訶薩・
- c4 bodhisatvāya(蔡-ttvāya) mahāsattvāya mahā-kāro(蔡-u)- / 大悲者に歸命。
- c5 ṅikāya Namō bhagavate Vipula-vima(vimā と訂正)- / 世尊に歸命。
- b27-9 摩訶迦嚩尼迦耶(十三)娜謨 薄伽伐底 毘補羅 毘摩那(十四)
/ 廣大なる
/ よく安定した天宮において
- c6 n(蔡-l) a-su-pratiṣṭhita-saṃghya-(蔡-a-saṃghyā 採用) Sūrya-śata-saha-
/ 百千の
- b29- 素鉢唎底瑟恥多(十五)僧棄耶 素唎耶 舍多娑訶薩囉
/ 太陽のように
- c7 sra-at(蔡 ati 採用) reka-prabhava-bhasittāmṛtya(蔡 ava-bhāsita mūrtatye) Mahā
/ 優れて
- c3- 阿羝唎迦(十六)鉢囉婆阿嚩婆悉多 慕栗怛曳(十七)摩訶
/ 輝く大いなる
- c8 maṇi makuṭa-kunḍara-dharide(蔡-la dharīṇi 採用) Bhagava-
/ 寶珠・[寶]冠を
- 90c5- 末尼 摩矩吒 軍荼囉 陀栗泥(十八)薄伽伐 / 頂く
- c9 te Padma-pāṇaye, sarva-lokāpa(蔡 ā) ya-śama- / 蓮華手(觀自在菩薩)に
底 摩訶鉢頭摩 波拏曳(十九)薩囉婆 路迦阿跛耶(二十)奢麼

5 梵文では Āryāvalokiteśvara, 漢訳は「阿唎耶跋路枳帝濕嚩囉」で、觀自在に外ならない。

- / [歸命]。一切
/ 世界の悪處を
- c10 **naya** (蔡 *nāya*), **vividha-bhaya-duḥkha-samaveśa** (a 本, 蔡 *samāveśa*) 「āvi-
/ 鎮める
那耶 (二十一) 毘毘陀 毒佉 c9- 三摩鞞舍 吠瑟吒 (二十二)
/ ため, 一切の衆生を
- c11 **ṣṭa** (a 本) -**sarva-satva-**(蔡 *sattva*) **parimocanāya. Tadyathā,**
/ 開放(解脱)せしめる
薩婆 薩埵 跋哩慕者那耶 (二十三) c23- 怛姪他 (二十四)
/ ため, そこで, 即ち
- c12 **om, bhūr bhuvaḥ mahā loka karaṇātmas** (蔡 *kāraṇā* 「*tamas*) **ti-**
/ 左様です。大地・
唵 (二十五) 勃部皤 (二十六) 摩訶路迦羯囉皤 (二十七) 哆麼 (二十八) 悉
底 / 天空・
- c13 **mira-paṭara-vinaśana-karaya** (蔡 *vināśana-karāya*) 「**rāga-**
/ 大世間は作用を本質とする。
弭囉 (二十九) 鉢吒囉 (三十) 毘那舍那迦囉耶 (三十一) 囉伽
/ 暗闇と光明の消失を
/ 作るため 貪欲・憎悪 (瞋恚)・愚癡の網目を
- c14 **dveṣa-mahā-moha-jala**(a 本 *jāla*) -**śamaka-śamaka**(蔡 *moha jaḍa saṃśaya śamana*)
/ 鎮め
墜沙 摩訶慕訶闍羅 (三十二) 奢摩迦 (三十三) 奢娑迦 (三十四)
/ 鎮め 護る。
- c15 **rokṣaka** (a 本 *rakṣaka*) [h]. **Sarvāpa** (a 本 *ā*) **ya-duḥkha-**
(蔡 *duḥha apāya-*) **durgati-** 「**praśa-** / あらゆる悪處の苦を,
囉訖叉迦 (三十五) 薩婆 毒佉 波耶 突唎揭底 (三十六) 鉢囉舍
/ 鎮めるために
- c16 **ma-kana-karaya** (a 本 *karaṇa-karāya*) **sarva-tathāgata-** 「**sama-** / 一切の如来に
麼迦那揭囉耶 (三十七) 薩婆 怛他揭哆 (三十八) 三摩 / 出會いを致し
- c17 **vanvana** (a 本 *vadhāna*) **kara-sarva-satvāśa-paripura** (蔡 *sattva-āśa-pari-pūra-*)
/ 一切衆生の

- 嚩搭那羯囉 (三十九) 醯醯 (四十) 摩訶菩提薩埵嚩囉搭 (四十一) 鉢頭摩路迦三步陀 (四十二) / 願望を満たし、一切の衆生・衆生の
- c18 ka-sarva-satva-satva-sama-sva-sakara (蔡 sattva samāśvāsa-kara) 「ehye (ehy) e-醯 (四十) 摩訶 菩提薩埵 嚩囉搭 (四十一) 鉢頭摩路迦三」 步陀 (四十二) / 慰安となり、さあ・さあ、
- c19 hi mahā-bodhisatva-varada-padma- (蔡 vara-da padmini) lokṣaṃ (a 本 loka-saṃ-) / 大菩薩・恩恵を授けるお方
摩訶 迦嚩尼迦 (四十三) 折吒麼矩吒 楞訖栗哆 (四十四)
/ 蓮華世界に生まれ出た
- c20 bhūta [(蔡 sukhāvatiṃ saṃ-)] mahā [kā] ruṇikā (a) -jaṭa-makuṭa-luṃkṛ (蔡 jaṭā-makuṭa alaṃ-kṛ) - / 大悲なる・結髪・天冠に
摩訶迦嚩尼迦 (四十三) 折吒麼矩吒 楞訖栗哆 (四十四) / 飾られた頭に、
- c21 ta-śīrasi maṇikanaka-rājata-vajra- (蔡 ta śīras, maṇi kanaka rajata vajra) / 寶珠・黄金・
舍唎蘭摩尼 羯那迦 囉闍哆 跋折囉 吠住离耶 (四十五) 楞訖栗多
/ 白銀・金剛石・
- c22 vaiḍurya luṃkṛta śarīrata śarira (蔡 vaiḍurya alaṃ-kṛta śarīra) Amitābha-ji- / 瑠璃に飾られた身の阿彌陀 (無量光) 佛 (勝者) よ。
舍利囉 (四十六) 阿弭哆婆視 / 蓮華の花の首飾り (華鬘) を着けた
- c23 na kamala-luṃkṛtana- (a 本 mālā alaṃ-kṛta-) pravara-nara-nāri (a 本 + -ī-jana [h]) (蔡 na gātra suvarṇa-varṇe a-pratima prāsādika) / 上着を纏う男女の人々
那 (四十七) 迦摩囉 摩囉 楞訖 栗哆 (四十八) 鉢囉幡囉 那囉那哩
/ 少しく
- c24 [kim] cana mahā-jana-nara-nāri-śata-sahā (a 本 saha) - (蔡 bodhisattva mahā-sabhā parivāra śata-sahasra) / 大衆の男女の千人に願われた身の
者那 (四十九) 摩訶社那 娜囉 那唎 (五十) 舍哆娑訶 / 大菩薩よ。
- c25 sra avilaṣitakaya (a 本 abhilāṣita-kāya, 蔡 a-vivartika pari-vṛta) -mahā-bodisattva 薩囉阿毘囉使哆迦耶 (五十一) 摩訶菩提薩埵 (五十二)
/ 吹き去れ、吹き去れ、
- c26 vidhama, vidhama, vināśaya, vināśaya, mahā-yantro, kle- (以上 a 本) - (蔡 viccheda vi-ccheda, vi-nāśaya vi-nāśaya, mahā-moha kle) / 失せよ、失せよ。

- / 大機関 (有情) は、
 毘駄摩毘駄摩 (五十三) 毘那舍耶毘那舍耶 (五十四) / 煩惱 [を起こす]。
- c27 śaka bāṭa bhama rdha saṃsara-caraka-pra (蔡 śa-āvaraṇa saṃsāra-duḥkha pra-)
 /…輪廻にさまよう者を
 摩訶 演睹魯訖隸奢 迦幡吒 幡畔哆 僧娑羅遮囉迦 (五十五) 波羅迦
- c28 math [a] na-puruṣa-padma-puruṣa-nāga-puruṣa (蔡 mathana Puruṣa-paśu
 puruṣādaka??) / 悩ます人・人の蓮華・
 囉摩他那 (五十六) 布嚧沙鉢頭摩 (五十七) 布嚧沙那伽 (五十八) 布嚧沙
 / 人の龍・
 / 人の海・
- c29 sa(=sā)gara viraja viraja ya sutanta sutanta maya giri giri vili vili buru(蔡??)
 / 離垢なる・離垢なる
 娑伽囉 (五十九) 毘囉闍 毘囉闍耶 (六十) 素誕多 素誕跢 (六十一)
 / 經典 (sūtrānta)・經典より成る山・
- 91a1 pari-vṛta. Dhama dhama, sama sama, / ヱイリ・ヱイリ・ブル
 91a10 鉢哩筏哩多 (六十二) 駄摩 駄摩 (六十三) 些摩 些摩 (六十四)
 / 囲まれ、吹け
 / 吹け、平等平等
- 90a1 pṛṣṭa-nadama pṛṣṭa-nadama sama sama dhuru dhuru praśa-(蔡??)
 / 静めよ・
 度嚧 度嚧 (六十五) 鉢囉奢薩
- a2 maya praśamaya giri giri viri viri cili cili curu (蔡???)
 / 静めよ。山・山・ヱイリ
 耶 (六十六) 鉢囉奢薩耶 (六十七) 祁離祁離 (六十八) 毘離毘離 (六十九)
 只離只離 (七十) / ヱイリ・チリ・チリ・ノチュル・チュル・
- a3 curu muru muru muyu muyu muñca muñca rakṣa rakṣa ma-(蔡???)
 / ムル・ムル・ムユ・ムユ。開放せよ。
 姥嚧姥嚧 (七十一) 姥庚姥庚 (七十二) 悶遮悶遮 (七十三) 度那度那 (七十四)
 / 開放せよ。
 / 護れ、護れ。私と私の全ての有情達の
- a4 ma sarva satvānāṃ ca sarva-bhayebhyaḥ dhuna (蔡???)

- / あらゆる恐れを払え・
- 毘度那 毘度那(七十五) 度嚕度嚕(七十六) 伽耶 伽耶(七十七)
- a5 dhuna vidhuna vidhuna dhuru dhuru gaya gaya gadaya
 / 払え・よく払え・よく払え・
 (蔡 gr̥dha-citta; matsara mūḍha-citta muñca muñca) / 家よ・家よ。語れ。
 91a18- 伽駄耶 伽駄耶(七十八) 喝娑喝娑(七十九) 鉢囉訶娑 鉢囉訶娑(八十)
- a6 gadaya hasa hasa prahasa prahasa vidha vidha kr(?) eśadhā
 / 語れ・笑え・笑え・ / よく笑え・よく笑え。
 (蔡 dhuta dhuta, vi-dhuta vi-dhuta; dhū-ru dhū-ru gr̥dha gardha ghātaya ghātaya;)
 / 治めよ・治めよ。
 毘毘駄(八十一) 羯隸奢(八十二) 嚩薩那麼麼寫(某甲)(八十三)
 / 煩惱を興す者達よ。
- a7 sana mamasya hara, kr (?) eśadhā sana mamasya hara, saṃhara saṃhara
 dhuru- / 古き者よ。
 私の者に運べ, 煩惱を興す者達よ。私の者に運べ, 古き者よ。
 私の者に運べ。
 (蔡 hāna hāna, pra-hāna prahāna vi-vidha kleśa-vāsanā mamasya. ārya)
 / 持って来い,
 荷囉 荷囉(八十四) 僧荷囉 僧荷囉(八十五) 睹嚕徴(八十六)
 / 持って来い,
- a8 ṭ(t)i dhuruṭi mahā-maṇḍala-kiraṇa-śata-prase-
 / と, 大曼荼羅の光の百千の発する
 (蔡 mahā maṇḍala-janman kiraṇa śata-sahasra-raśmi)
 睹嚕徴 摩訶 曼荼羅(八十七) 迦囉拏(八十八) 舍哆鉢囉細迦(八十九)
- a9 ka-vabhasa(蔡 ava-bhāsa) visana (a 本 viśana, 蔡 vi-śāda) -śamaka-mahā-bodhi-
 / 光輝の入り込む
 91a24- 幡娑娑(九十) 毘娑那 舍麼迦(九十一) 摩訶菩提
 / 大菩薩, 恩典を賜るお方よ。
- a10 satva(蔡 sattva) varada(蔡 ā-śaya mama) svāhā 薩埵(九十二)
 幡囉駄(九十三) 莎訶(九十四句) / 栄えあれかし。

ローマ字版「千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神呪」の「奥付」: Transliterated in the year 1986 from volume 20th serial No. 1057 of the Taisho Tripitaka by Mr. Chua Boon Tuan (蔡文端, 蔡と略記) of Rawang Buddhist Association (萬撓佛教會)。ここまで「蔡」の所見を付記したが、採用に及ばず、無駄であった。

難渋しながら以上に見て来た通り、身呪(陀羅尼)の内容は、単に千眼千臂觀世音(觀自在)菩薩だけへの信仰儀礼ではない。それは一切知者、三宝、無量光(阿彌陀)佛、觀音(觀自在)菩薩、大勢至菩薩への帰依に始まり、觀音(觀自在)菩薩に対する繰返しの多い祈願と賛美の文句で終わる、觀音信仰儀礼の一端を語っている。梵文では觀自在に対応するが、智通は漢字の菩薩を觀世音とする⁶。

尤も、後には智通にも玄奘に倣ったかのような、「觀自在菩薩隨心呪經(亦名多唎心經)」(T.20. No.1103a, 457bff. 麗本)と、その別本「觀自在菩薩怛囑多唎隨心陀羅尼經」(T.20. No.1103b, 463bff. 明本)もある。共に明かに經中に「觀自在菩薩」とあるが両本とも經文本文では、冒頭から「觀世音」を用いる。特に麗本では「觀自在」は經名以外にはない。明本では本文にも觀自在が4回出るが觀世音の15回には及ばない。ここで漢訳の經名自体にも疑いがあり、「觀自在」を冠する經名は、後人による改称であることを示すかのようなのである。既に註記したように、智通は、梵文陀羅尼本文とその漢訳の註釈では Avalokiteśvara を繰返していたのである。

5 千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經の和訳・解釈

麗本(a本)には半頁ほどの難解な序「千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經序」が付いて本經の伝来と翻譯に関する記述があり、經末には悉曇文字による41行の梵文がある。明本を定本とする別本(b本)には梵文がない。共に上下2巻

6 前註5参照。この点は従来の『佛書解説大辭典』等では忘れられていたようである。しかし『大正新脩大藏經』卷30の編集担当者は梵字を正確に覚えていたことは疑いの余地がない。梵字の知識は大したものだが、ほぼ単語の知識の範囲に止まり、梵文の意味をよく読めたとはいえない。それが出来るようになるのは昭和末期以降であろうか。私は曾て齋藤彦松(1918-1993)氏より頂いた自著『昭和51年梵字教室テキスト』に学んだ。同氏の履歴と業績と人柄は「清水磨崖仏群と齋藤彦松—南薩日乗」inakaseikatsu.blogspot.com/2017/07/blog-post.html を閲覧して始めて知った(2019.07.21)。

からなる。今は難しい経序は後回しにして、a本の巻首から見よう。漢文の読み下しでは、なるべく旧字体のままにし、敢えて口語譯を試みる。呪文の中には私には意味が取れない箇所も少なからずあって、片仮名で示すだけに止めた所も多い。

(T20, 83c16) 千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經卷上 大唐總持寺沙門智通譯

そのとき觀世音菩薩・摩訶薩は、佛・世尊に申し上げる。

「この私の前身の不可思議な福德の因縁で、今世尊より私に豫言（受記）を蒙り、一切の衆生に利益を與えようと欲して大悲心を起こし、よく一切の繫縛を斷じ、よく一切の怖畏を滅し、一切の衆生はこの威神を蒙り悉く皆に苦の因を離れ、安樂の果を獲させよう。もし善男子・善女人が、我が滅後の五百歳中において、よく一晝夜（日夜六時）において、法に依って此の陀羅尼神呪法門を受持すれば、一切の業の障りが悉く皆消（84a1）滅し、一切の陀羅尼神呪法門が悉く皆成就するであろう。今私が世尊の恩徳に報いようと念ずれば、隨って在る何等かの村・城市・町・聚落、或いは山野、或いは林間に在って、私は常に隨って是の人を擁護しよう。一切の鬼神にようがいの燒害するところとは、させますまい〔と〕」。

その時、觀世音菩薩は又佛に白して言わく、「世尊、後の五百歳中の衆生は、あか垢重く薄福の者が多く、專念することが出来ない。設し〔教えを〕受ける者がいても、或いは鬼神に侵害せられよう。今私は佛の威神力を以って、廣く一切の衆生を饒益せんが爲に、天人・阿修羅等を安樂ならしめ、陀羅尼法を説く爲に、私は過去にようやくの無量劫中において、曾て是のような陀羅尼法に親近し供養し、乃至過去・未來・現在の諸佛にいたるまで、皆此の陀羅尼法門に因って、阿耨多羅（無上の）三藐三菩提（正等覺）を得る善男子・善女人等がいるなら、專念して此の陀羅尼法門を受持する此の人は、現世において口説が利に流れ質礙する所が無く、慧・辯が通達する。一切の天・人の大衆中において最も第一と為す。聞く者は歡喜し皆悉く稽首する。生ずる所處に在って、常に佛法僧を見るを得て、言説有る所で、人は皆信受する。當に此れは是れ諸佛いじんの威神の力と知るがよい。我が自力ではない。

爾その時、世尊は觀世音菩薩を讚歎して言わく、善き哉、善き哉。汝は能く是の如くなす。天・人・阿修羅等及び淨業道を利益し安樂ならしめよう。我れ今、

智印を以って之に印し、汝をして永く不退轉ならしめよう。

爾の時、觀世音菩薩、又佛に白して言わく、「世尊。我過去無量劫中を念うに、此の陀羅尼法門を持して、布怛羅 (Potala) 山中に在って、乃ち魔王の領する諸魔衆に逢って惱亂され、我が法令をば呪句に成らぬようにしようとした。爾の時に我は此の陀羅尼法を以って、慈悲するが故に利益の故に天人を安樂ならしめんが故に、即ち姥 (老母) である陀羅尼法を説こう。

以下に前掲した b 本の「根本大身呪」や a 本の「千眼千臂觀世音菩薩大身呪第一」の94句が続く。今は次に簡明な a 本 (= 麗本) に沿い、以下の文脈を辿ろう。

(T.20. 84c24) その時、觀世音菩薩摩訶薩は、此の陀羅尼 = 薄伽梵・蓮花手嚴飾寶杖と名づくるを説く。世尊は大金剛歡喜殿において説く。尊勝菩薩及び無量の天・龍・緊那羅の讚歎する所の爲に、廣大な業障の山を摧壞する爲の故である。若し聞くことを得る者が有らば、彼の人^{ごうしやう}の所有する一切の煩惱の業 (85a1-) の障りが悉く消滅を得る。此の陀羅尼を誦する者は、常に觀世音菩薩の爲に、若し人有^{じんじやう}って晨朝時に於いて尊重心を生ずれば、恒常に隨逐して是こに人を擁護するであろう。思念する所の事は皆成就を得よう。若し願を求めるもの有^{ごん}って成就を得しめる者は、當に獨坐し靜處して、心に觀世音菩薩を念じて更に餘縁無く、此の陀羅尼を誦すること七遍すれば、願として果たさざること^{さいえ}は無^{ごん}い。又一切衆生の愛樂する所を得て、一切の諸惡の境涯 (趣) に墮ちない。若しくは坐り若しくは行き若しくは住むに、常に佛を念じ目前に對するが如き者ならば、是の人は無量百千億 (俱胝) の生において、有らゆる積集せる諸惡罪業が皆消滅を得よう。是の人は當に千の轉輪王の福を具足するを得て、生生常に觀世音菩薩ともなることを得よう。同時に生々貴姓の家に生まれ出るのであろう。若し一掬を滿たす香花をもって觀世音菩薩の前に散じ、此の陀羅尼を誦すること七遍する者は、大千の功德・大悲の法性を得よう。

彼の人は世間に於いて大力の成就を得る。若し菩薩の面を看て此の陀羅尼呪を誦する者は、即ち觀世音菩薩の微笑の相を見ることを得て、見終れば即ち離垢地^りを得、能く世間を照耀する。即ち此の生において當に佛を見るを得て慈念によって攝授せられよう。命終の時に臨んでは禪定に入るが如く、生生 (世世) の諸の宿命智を得よう。有らゆる罪障は皆悉く消滅するであろう。若し此の陀

7 華嚴經類で説く菩薩の十地の第二地。なお容易に辞書類で知りえる術語には註記しない。

羅尼を受持しようとする者は、當に白月（上弦）の十五日に於いて八戒齋を受持し白淨の衣を著け、舍利の有る佛塔及び舍利の有る佛〔像〕の前において、並び得てこれを作すに、白檀を用いて泥塗の壇を作り（其の白檀を石の上において磨き糝を取って用いて地に塗り）種種の花をもってその壇の内に散らし、佛前に香を焼き燈を然し、即ち佛前において恭敬心を生ずれば、觀世音菩薩が而して是の壇内に來入せられよう。當に此の陀羅尼を一百八遍誦すべし。〔そうすれば〕是の人の所有一切の罪障：五逆（母を殺し、父を殺し、阿羅漢を殺し、仏身より血を出し、和合している僧団を破る）の重罪は悉く皆消滅するであろう。身・口・意の業は皆、清淨となることを得て、佛の三昧の力、灌頂の力を得る。〔布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の〕波羅蜜の地の力・殊勝なる智の力が悉く皆成就するであろう。

若し雨を須める時において當に其の〔地〕面を視て此の陀羅尼を誦すれば、甘雨時に應じて即ち下り、即ち水を得て還って盈満し、若しくは一切の病患〔を免れよう〕、當に此の陀羅尼を誦すべし。手を以って之を摩すれば即ち差（病患）を除くことを得るであろう。

失念(85b1)の者の近く（邊）において、此の陀羅尼を誦すれば、〔その者は〕還って正念を得るであろう。若し飢渴（飢えや渴き）の人の近くにおいて當に、その面を見てこの陀羅尼を誦すべし。所有飢渴が悉く皆消滅するであろう。若し結界を欲し、當に池水の中に入り、此の陀羅尼を寫し幢の上に繋ぎ著けるがよい。一百由旬（yojanaは駄獸の1日行程：約20km.）の内に諸の衰えや患いが無いであろう。即ち結界を成して擁護・成就するであろう。

千眼千臂觀世音菩薩總攝身印第一。

先ず起立し端身並びに脚（脚）を揃えて立ち（齊立し）、右脚（脚）を微かに曲げること少し許り、先ず左手を以って下に舒べ、中指を以つて無名の指と並べて屈して掌中に著ける。小指と食指（人差し指）と大母指（親指）とを散げて舒べ、掌を仰いで上に向ける。次に右手を以つても亦然のようにする。肘を屈し膊と掌を前に向ける。此れは是れ總攝身印である。若し魔の怨みを降伏せしめようと欲し、諸外道の邪見の密（稠）林に及んで正道に入ら令めようとする者は、當に此の印誦陀羅尼二十一遍を作すなら、必ず願う所の如くなるであろう。呪に曰く

那^上謨曷囉^{二合}怛那^{二合}怛羅^{二合}夜耶^一 (Namo ratna-traya 三宝に帰命)。

那謨阿利耶^二波路吉帝攝伐^{二合}囉耶^三 (Nama Ārya-Avalokiteśvarāya 聖觀自在〔菩薩〕に帰命)。菩提薩埵耶^四摩訶薩哆跋耶^五摩訶迦嚕尼迦耶^六 (bodhisattvāya mahāsattvāya mahā-kāruṇikāya 菩薩摩訶薩・大悲者に帰命)。怛姪他^七阿^去跋陀阿跋陀^八跋唎跋帝^九 (Tadyathā, a-bādha a-bādha balivate 即ち、恩典ある者に礙げなし、礙げなし) 禮醯夷醯^{十去}訶^{十一} (ehy-ehi svāhā 来たれ、来たれ、栄えあれかし。蔡文端氏の還元梵文を参照。)

(T.20. 85b18) 千眼千臂觀世音菩薩總攝身印第二。

前に^{なら}准う身印の上において合掌し心〔臟〕に當てるに五指を以て^{あいはさ}相叉み、左を押し右〔を押し〕、二本の親(頭)指を以て〔真〕直に縦(豎)に頭を相^ま拄え、其の大母指を頭に付け、〔他の〕指は第一文の上を押さえる。^{てのひら}掌は少し開く。此の印を名づけて總持陀羅尼法という。

此の印を作す者は、能く無量の生死の劫〔以〕來の惡業を滅除するであろう。罪障は一時に消滅し、當來に十方の淨土に往生するであろう。

往昔に釋迦牟尼如來が、さと(成道)を欲するに臨んで魔王の惱ます所と^な為り、此の總持陀羅尼印を作つて安樂なる禪定を獲得したという。呪に曰わく

(T.20. 85b26) 跢姪他^一薩婆陀羅尼^二曼茶羅耶^三 (Tad-yathā, sarva-dhāraṇī-maṇḍalāya 即ち一切の陀羅尼・曼茶羅のために)、醯曳醯^四 (ehy ehi 来たれ、来たれ)。鉢囉^{二合}摩輸馱^五薩跢跋耶^六莎訶^七 (parama-śuddha-sattvāya svāhā 最高に清淨なる衆生に、栄えあれ)。

千眼千臂觀世音菩薩解脫禪定印第三。

先ず^{へんだん うけん}偏袒右肩し、右膝を地に著けて合掌し、〔頭の〕頂上に、二頭指を屈し、(85c01)頭相をもって^ま拄え、二大指を頭に付けて、第二文上を指さず(意味不明?)。

此の印法を名づけて解脫禪定印という。過去の諸佛も同じく此の法を修したのである。禪定・解脫・神通を得て毎に此の法の供養を以てする。^{つね}十方の諸佛を見るを得て了然として目の前にある。〔以下は〕前呪と同じ。

(T.20. 85c5) 千眼千臂觀世音菩薩千眼印呪第四

起きて立ち足を並べ、先ず二つの中指と無名〔指〕と小指とを以て、各甲^{おのおの}

を以って背に相い著^つけ、其の二頭指（人差し指）を豎^{たて}に頭を相い拄^{ささ}え、其の二大母指（親指）の側を搏^うち、頭を指第二文上側に付け（意味不明）、腕を五寸許り開いて眉間に置く。此れを千眼印と名づく。此の印を作り法門を呪すれば、即ち百千萬億世界の佛刹淨妙の國土を觀見し得る。一一の佛國は各百萬四千の菩薩を得て行者と同じ伴侶と為り、若し未だ三つの曼荼羅⁸を経ていない者も、必ず見るを得るであろう。此の印の法門と呪印を得ないなら、人に罪を得させるであろう（此の法印を通り作し親しく驗^{げん}があつて菩薩の受法は智通とともに凡そ願い有る所は悉く皆満足するであろう）。呪に曰わく：唵¹薩婆斫²芻³伽羅耶⁴陀囉尼⁵（三）因⁶（去）地唎耶⁷（四）莎訶⁵） Om, sarva cakṣu grāhya dhāraṇī indriya svāhā / 左様です。一切の眼、所取（認識対象）、陀囉尼、感官（根）、榮えあれ。

(T.20. 85c16) 千眼千臂觀世音菩薩千臂總攝印第五。

起き立ち足を並べて、先ず右の手掌^{てのひら}を仰いで五指をそれぞれ（各）相附けて、後に左の手の掌^{てのひら}をもって、仰いで右の掌の上に押し當て、心〔臟〕に著ける。此れを總攝千臂印と名づける。此の印は能く三千大千世界の魔の怨みを伏せる。呪に曰わく。怛姪他¹娑盧枳帝²攝伐囉耶³薩婆咄^{徒納反}瑟吒^{四二合} Tadyathā, Avalokiteśvarāya sarva-duṣṭa 烏訶彌耶^五莎訶^六 ūhāniya svāhā / 即ち觀自在〔菩薩〕により一切の罪障が/轉換するであろう。榮えあれ。

(T.20. 85c22) 千眼千臂觀世音菩薩通達三昧成印第六。

起立し脚^{すね}（脚）を以って跟^{かかと}と跣^{ききあし}⁹とを相け、先ず左の手を以って五指を豎^たて相い搏^うち肘を屈し前に向けて託^よせる。此れを通達三昧印と名づく。此の印は能く一切三昧智印に通達せしめ莊嚴し、方便により八萬四千の法門に〔通達するに〕、皆な此の法に因って阿耨多羅三藐三菩提（無上正等覺）を得るに前の大身呪を用いる。

千眼千臂觀世音菩薩天龍八部神鬼を呼召し集會する印第七

(T.20. 86a1) 起立して足を並べ、先ず左手を以って無名指（薬指）を大母指（親指）の甲^{ひね}の上に捻ねる。次に右手を以っても亦、是の如くに作す。二小指及び

8 ここでは茶を荼に改めて示した。

9 跣はチュ、ヂュ。冢庾切。つよい足。勇足… 諸橋徹二『大漢和辞典』巻十、p. 908b 参照。

中指は直に豎に頭の相と跂と腕を合わせ相附著する。頭指（人差し指）を以って來去する。呪に曰く唵^{まっすく}薩^{たて}婆^{なら}提^{ききあし}婆^{あひ}那^{あひ}伽^{あひ}阿^{あひ}那^{あひ}唎^{あひ}莎^{あひ}訶^{あひ} Om, sarva deva nāga anārī ehyehi svāhā / 左様です。一切の天・龍・非人は來たれ。榮えあれ。

(86a5) 千眼千臂觀世音菩薩, 大梵天王及び橋尸迦を呼び召し來て問う法印第八。

前印の上に准って、腕を開いて手の側に以って相拄え、掌を仰いで頭を以って指し來たって去る。呪に曰はく、唵^{なら}摩^{あひ}訶^{あひ}梵^{あひ}摩^{あひ}耶^{あひ}理^{あひ}醯^{あひ}夷^{あひ}醯^{あひ}莎^{あひ}訶^{あひ} Om, Mahā-brahma ehy-ehi svāhā

/ 左様です。大梵天よ。來たれ。來たれ。榮えあれ。

此の印呪法は、能く無量・無数の陀羅尼印法門を攝め、皆な悉く來集し、若し日月の蝕ける時に、呪酥（= 誑）すること二十一遍して、印を以って印の酥を食する者は、人をして聰明なら令めて、日に萬偈の此の印の法門を誦せしめよう、と日藏如來が觀世音菩薩に授與したもうた。

(T.20. 86a14) 千眼千臂觀世音菩薩が歡喜し、摩尼が意に隨う明珠の印第九

起立し合掌して心〔臓の位置〕に當て、二つの大母指（親指）を以って雙べ屈し掌中に入れる。餘の四指を直ちに豎て合掌し、心に當てて前の大身呪を二十一遍誦える。〔すると〕決定して諸天の宮殿に入ることを得て、十方の諸の佛國土に遊歴する。百千萬の珍寶は意に隨って須いる所となる。皆諸佛菩薩金剛一切の聖衆を供養することを得て、若し人有って能く此の法門を作す者は、晨朝に早く起きて清淨に潔い漱ぐ。此の印の法を作せば、面に十方の恒河沙の佛に見え、無量劫來の生死の惡業・重罪を滅除するであろう。是故に是の如き功德を讚歎しよう。皆百千萬の珍寶は意に隨って須いる所となる。

諸佛菩薩金剛一切聖衆を供養するを得て、若し人有って能く此の法門を作さんとする者は、晨朝に早く起きて清淨に潔い漱ぐ。此の印の法を作すなら、面のあたりに十方恒河沙の佛に見え、無量劫來の生死の惡業・重罪を滅除するであろう。是れ故に是の如き功德を讚歎しよう。

(T.20. 86a24) 千眼千臂觀世音菩薩願を乞い心に隨う印第十

前の印に准って、二つの頭指（人差し指）を屈して二つの大母指（親指）の甲の上に押し、若し人の求める所に隨って願えば、皆悉く満足するであろう。

必ず不退の菩提^の之道に定まるであろう。

千眼千臂觀世音菩薩滅盡定に入る三昧の印第十一

(86b01) 前の印に^{なら}准^{ただち}って直に〔親指以外の四指を〕^た立てて頭に散らし大母指(親指)を指す。掌を開く。此の印は我が因地(菩薩位)に在る時に乃ち恒河沙の諸佛から我が此の法を受けること有^たって我をして菩提を得るの道を證せしめした大身呪を誦する。

(T.20. 86b04) 千眼千臂觀世音菩薩佛に請う三昧の印第十二

前の印に^{なら}准^{ただち}って合掌して心に當てて、頭指(人差し指)を來去させる。呪に曰わく：唵^一薩婆伽陀三摩^去耶^二理¹⁰ 醯^三夷^三醯^三 Om, sarva-buddha-samaya ehy ehi / 左様です。一切の仏の時。來たれ。來たれ。鉢囉^{二合}摩輸陀薩埵^四莎訶^五 parama-śuddha-sattvāya svāhā / 最高の清淨なる有情に幸いあれ。

(T.20. 86b8) 千眼千臂觀世音菩薩が置く十肘曼荼羅壇法。

次に説くのは壇法である。凡そ一切の曼荼羅を作る法門の時に、謹んで梵本を案ずれば云わく：此の國土には曼荼羅を作る地が有ることが無い。彼の天竺の如きは皆勝福德の地を取り上げて以って壇場と為す。婆羅門國には別に地を擇ぶ方法が有るが、〔今〕廣く説くことが出来ない。且く此の漢地を論ずるなら、第一に山居の閑靜之處、山の頂上に形勢有る處に在る。地を掘り其の石や礫^{こいし}及び瓦器・惡土の物等を去って、それから平らに治め始め、牛糞(瞿摩夷 gomati)を以って香と和せて地に塗る。縦の廣さは一丈六尺、^{もと}基を起こすこと十二指乃至十六指、一肘を以って最(勝)上と為す。第一に白栴檀香を取って、其の石の上に於いて磨き、^{かゆ}糸を取って曼荼羅の上に塗り、五色の粉を以って^{さかい}界を摸どる。其の壇に四門を開く。

(86b19) 東方の門には提頭賴吒(Dhṛtarāṣṭra, 持國)天王を安〔置〕し、南方の門には毘樓勒叉(Virūḍhaka, 增長)天王を安〔置〕し、西方の門には毘樓博叉(Virūpākṣa, 広目)天王を安〔置〕し、北方の門には毘沙門(Vaiśravaṇa, 多聞)天王を安〔置〕し、次第に天王を安〔置〕し、左右には眷屬^{おのおの}に及んで各本位に居らしめる。其の曼荼羅の中心に千眼千臂觀世音菩薩像を安〔置〕する。〔觀

10 この字はどの辞書類に見あたらない。文脈上は夷と同音と思われる。

世音菩薩]像の前に案^{つくえ}を置き、案の上に呪法〔經典〕を置き、種種の香^たを焼き種種の飲食を安〔置〕し、種種の花を散らし以って供養と為す。唯、雑な物・薰^{くさ}い・辛い物・酒肉を除く。

自ら外で日〔毎〕別に造る新しい香りよい〔新〕鮮な花樹や果子(果物)を〔觀音〕像の前に於いて三つの白食に乳・酪・酥・蜜^つを著け、檀香・沈香^たを焼き、酥合香・龍腦香を〔焼く〕。毎日三回(時)洗浴し、三律儀(samvara)¹¹を受け、至心に呪^{とな}を誦え千眼觀世音菩薩に供養する(86c01)。晨朝(夜明け前)と〔正〕午時と日暮とに供養する。日毎(別)に闕かさない。是の如く乃至、三七(二十一)日にして、新意の供養が畢^{おわ}って來たる呪師に見え、壇を作り地を背に作法をして、一切の皆を呼召して圖畫像形に上げる。今、梵本を案^{かく}ずるに此の如き事がない。

但だ其の呪師は東方に面を向けて呪を誦えると知る。前の第一第二第三、乃至十二の〔呪〕を作る。佛の三昧の印を請うのに何ぞ假設の印に勞するののか。前の印を作り一遍に各呪七遍^{とな}を誦えよ。乃至第十二印^おで畢わる。當に自ら不退堅固の〔心〕を發^しすべきである。但だ作法をもって呼召して一切皆を來たらしめ、菩提決定心を發^さ令める。端坐して一切の呪想の神の其の眼前に在って、一つの障難も無くして畢竟を得ることはない。前の大身呪を誦すること、一千八十遍を滿たせ。爾の時、觀世音菩薩が當に化現し阿難の身と相貌^まを作し來て問う。行者の須^{もちい}る所の何の法を求め何を願^やう耶と(86c17此の法は智通自ら翻じ親しく供養を蒙り此の間を作り以ってここに之を録す。)

行者は白^{もう}して言わく、無上菩提を求める為に、陀羅尼の法を〔得たい〕と。若し受記(予言)を蒙^のる之時、唯願^{いんぎん}い慇懃の心を發して名利を求めること無かれ。

願^{もち}い須^{もち}いる所は一切の衆生を救うに同一の子と觀、又一切の鬼神悉く皆順伏するを願^{もち}い、願^{もち}いの如く已に得たるは、但^{ただ}自ら知る耳^{のみ}で人に向かつて伝え説くを得ない。

(86c17) 智通は此の法を翻〔譯〕し、玄バク(暮)¹²に與えた。その一本を

11 所謂無表色^{いわゆるむひょうしき}で表に表れない色であり、善悪の果で善・不善・無果の3種であるが、自らの向上を目指す。村上2000(1998)『仏教の考え方』国書刊行会、東京、pp. 99, 104, 110参照。宇井伯壽『佛教辭典』大東^改東成出版社、東京1953の「サンリツギ」は詳しく、向上の方法をも分類して示しており、参照に値する。

12 バク(暮)は諸橋徂二『大漢和辭典』卷十、p. 572aに出ており、p. 571cには、その別体「謨」が出ている。音はボ、モ。莫故切。またはバク、マク。末各切。はかる、ひろくはかる、策謀をはかり定める、とある。ここは人名で、智通の弟子の名である。

玄バク（暮）が 學び受けた。

若し一切の願を得ようと求め欲する者は、當に四肘の水曼荼¹³羅法を作すべし。沈水の香を焼き前の身呪一百八遍を誦えよ。前の第十乞願印を作れば、即ち一切を得て願の如く満足に詫るであろう。即ち却って此の一本を焚け。自らの外には更に此の如き供養は無い。一切の陀羅尼法門は悉く皆成就しよう。又は法を若し欲し一切の歡喜を得たい者は、作る前に第九摩尼隨意明珠印の身呪を誦えよ。呪烏麻二十一遍、火中において之を焼けば即ち如意を得よう。若し羅^二合^一闍（rajas, 刺激）の歡喜を〔大〕喝せ令めようと欲する者は、當に羅^二合^一闍園内の樹枝を取り喝すべきである。前に作った第十乞願印、即ち一切を得る願の如く満足に詫るであろう。闍園内の樹枝を呪二十一遍と共に、園中に擲げ置けば、即ち歡喜を得るであろう。若し悪人・怨家を降伏せしめようと欲する者は、當に苦練を呪う木を二十一遍火中において之を焼くべし。すると（即）歸伏を得るであろう。又は法、若しくは神鬼の難を調伏しようとする者有らば、安悉香及び白芥子を取って、呪二十一遍火中に擲て焼けば、一切の神鬼に病む者は自然に臣伏するであろう。疫病の流行有りと記せば、當に四肘の（T20. 87a）水曼荼¹⁴羅を作るべし。好き牛酥を取って呪一百八遍をもって火中で之を焼け。呪二十一遍園中に擲げ置けば即ち歡喜を得よう。一切の災疫悉く皆消滅しよう。又酥の少分を取れ。疫病人與之を食すれば立ちどころに即ち除愈しよう。昔、罽賓國に疫疾流行すること有って、人病を得る者は一二日にして並びに死んだ。婆羅門の真帝有って、將に此の法行をもって疫病の時に應じて、即ち〔疫疾の〕消滅を得たのである。病を行なう鬼王が國境を出離せば驗有るを知る。又の法で他國の侵繞や盜賊の逆亂が起り來る。前の第一總攝身印呪一百八遍を作ると、一切の盜賊は自然に殄滅する。若し一切の業報により衆生の命根が盡きるなら、前の滅盡定印を作り日日に供養せよ。況んや水香を焼き呪を滿一千八十遍も誦すれば、即ち當に其の業障を轉じよう。昔、波羅奈國に一長者がおり、唯一子が有り、その壽命（壽年）を合わせると十六を得た。年十五に至ると、一婆羅門が家々の門を巡って乞食していた。其れを見て長者は愁憂して樂しまない。夫妻は憔悴して面に光澤が無い。婆羅門は問うて曰う。

13 茶を荼に訂正した。なお、ここの法式（ほっしき、行事の次第）は甚だ分かりにくいと迫力がある。

14 ここでも茶を荼に訂正しておいた。

「長者は何の為に楽しまないのですか」と。長者は以前の因縁を説く。婆羅門は答えて言う。「長者よ。心配（愁憂）要りません。但し私（貧道）の處にお子さんをよこし（分け）て下されば、壽命が長遠になりますよ。」

時に婆羅門は此の法門を作り、一日一夜後に閻羅王に報告するを得ると、云わく「長者の其の子の命根は只十六に合う。今已に十五だから唯一年有るだけだ。今善い因縁に遇って年八十を得ることになる故、来て相い報告する」と。爾の時長者夫妻は歡喜踊躍し、全て（罄）家資を捨て次に佛法衆僧に施した。當に此の法は不可思議で大神驗を具えると知るべし。すでに（已曾）大都會三曼荼羅金剛大道場に入る者は、曼荼羅を作るにおよばない（不須）。唯、結印と誦呪とを必要とし（須）、願として速かに當に成佛を果たさないことは無い。

若し女人有って出産の時に臨んで當に大苦惱を受けるなら、呪酥二十一遍して彼〔女〕にそれを食わせると、必ず安樂を得て、生まれる男女は大相好を具えよう。衆の善をもって莊嚴し宿徳の本を殖え、人をして愛敬せしめる。常に人中に於いて勝た快樂を受ける。

若し衆生が有て眼を痛む者が有るなら、呪師は菩薩千眼印呪二十一遍を以つて、印を以つて眼に印けると眼は即ち除つて愈まる。此の大因縁を以つて其の人は天眼（未來を見る智）を獲得する。光明をもって上の〔世〕界の、種種の天人が勝れた快樂を受ける處を徹かに見る。

(T.20. 87b) 次に像を畫く法を説く。謹んで梵本を案ると、像を造るには皆、白疊の廣さ十肘を用いる。此の〔唐〕土の一丈六尺である。長さ二十肘は此の〔唐〕土の三丈二尺である。菩薩の身は檀金色に作る。面には三つの眼、一千の臂が有る。一一の掌中に各一眼が有る。綵色中に膠を著けることを得ない。香と乳とを以つて綵色を和える。菩薩の頭に七寶の天冠を著け身には瓔珞を垂らす。又一本には云う。此の〔唐〕土には好い白疊の大きいものが無い。但一幅の白絹を取る。菩薩の身長五尺に兩臂を作る。前の第五千臂印法に依つても亦、供養を得る。千眼千臂を要しない。此の法も亦、梵本に依る。唯菩薩の額の上に更に一眼を安んじるなら、それでよい（即得）。若し此の法門を供養しようと欲する者は、必ず先ず像を畫くがよい（須）。其の像を畫く法は必ず曼荼羅を法のように作るがよい（須）。職人（匠者）に八戒齋を受けさせ（令）、便所（廁）に一回出入りする度に一回、洗浴させる。其の像を作成する時、其の畫匠及び呪師は恐らく多くは如法ではない（不）。そこで（即）必ず作法とし

て廣く供養を設け三七日を満足するがよい(須)。千臂千眼觀世音菩薩像の像に對して罪過を懺悔するなら、即ち壇中に安置すると、必ず大光明を放つこと日月にも過ぎる。〔ただし〕至心ならざる者を除く。其の千眼千臂觀世音菩薩像の法は、武徳年中(618-626)中に、天竺の婆羅門・瞿陀提婆(Godha-deva)が、此の像と本を將つて來進し、内に入つて即ち出でず、只だ千眼千臂と言ひ更に釋名は無い。又梵本を案ずるに菩薩は過去毘婆尸佛も亦、現に魔身を作つて降伏せしめた。

千眼中に各一佛を出し、以つて賢劫千佛と為すのである(也)。

爾の時、世尊は觀世音菩薩等に告げる。千臂各各が一轉輪聖王を化出し、此の菩薩は降魔身の中で最も第一と為す。我は佛の神力を以つて劫が窮まるまで廣く説いて盡きることを得ることを得ない(不能)。

(T.20.87b24) 千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經卷上。

(T.20.87c3) 千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神(87c4) 經卷下

大唐總持寺沙門智通譯

爾の時、觀世音菩薩が是の呪を説く時に、三千大千世界が、乃至、非想非非想天にいたるまで六反に震動し、色究竟天の自在天(魔醯首羅 Mahesvara)は不安になり、其の處において皆が大いに恐懼する。一切の惡鬼は皆大叫喚し大苦惱を受け、東西に散り走り、趣く所を知るものが莫い。爾の時に化身が諸大衆及び諸惡鬼神等に語る。若し我が呪に隨順せざる者・違逆する者は、頭が破れ粉碎するであろう。此の呪は能く諸の山を摧破し大海を乾かし竭くすであろう。此の呪は能く阿修羅の軍を摧き諸の國土を護るであろう。此の呪は能く一切の諸の惡鬼神・一切の諸の星宿・一切の惡毒・一切の諸病・一切の惡人を摧伏するであろう。此の呪は能く摧破して三十三天を皆降伏せ令めるであろう。若し善男子有つて、能く此の呪を誦持する者有れば、其の人の威力は説いて盡き可きものでない。此の呪を能く誦持せ令める者は豪貴自在である。亦た能く國王をして身を終えるまで愛念させるであろう。

意の求める所は悉く皆満足すると稱せられる。若し魔怨を降伏することを欲する者は、當に分求羅香?を燒き我身呪二十一遍を誦せ。若し一切の人をして己を愛するよう欲せ令める者は、呪の楊枝二十一遍を口中において嚼めば即ち愛敬を得るであろう。若し自身をして辯才の智慧ある者ならしめんと欲すれば、

呪昌蒲(?)一千八遍、其の心に塗り上げれば即ち辯才無礙を得よう。姥陀羅尼心呪印を作る。

(87c23) 千眼千臂觀世音菩薩辯才無礙印第十三

兩の手相を以って背に合掌し、大母指を前に向けて舒べよ。此の印は能く自らを護り他を護る。當に須からく結界し隨所に遊ぶ方、或いは淨水に呪し或いは淨灰に呪す。各呪七遍を唱え、所在の住處に手をもって水を掬い灰を掬って先ず自身を灑める。若し善男子・善女人あって、諸の惡鬼衆・邪魍魎の或いは亂れる所の者には石榴の枝及び柳の枝を取れ。陰に此の呪を誦し軽く病人を打てば(88a01)無病のもとと差わない。呪に曰わく

南無薩婆勒陀陸摩僧祇比耶^(二合) Namaḥ sarva-buddha-dharma-saṃghebyaḥ
南無阿利耶婆盧吉低攝伐羅寫菩提薩多波寫 Nama Āryāvalokiteśvarasya
bodhisattvasya / 一切の仏法僧に帰命。聖觀自在菩薩に帰命。

南無拔折羅^{二合}波尼寫菩提薩多波寫 Namō Vajra-pāṇisya bodhisattvasya. 踰姪他
徒比徒比迦耶徒比娑羅闍婆羅尼馱蟠^{二合}訶 Tadyathā, dhūpi dhūpi kāya, dhūpi
pra-jvalani svāhā. / 執金剛菩薩に帰命。即ち芳しき芳しき身よ。芳しき
輝くものよ。栄えあれ。

此の呪印は能く諸の邪見の外道を降伏する。若し善男子・善女人有って晨朝と〔正〕午時と日没との三時に於いて、一時に一遍誦する者には、即ち種種の供養と十億の諸佛との異りの有ることが無いのである。永く女身を受けず、命終の後には永く三塗(地獄・餓鬼・畜生)を離れる。即ち阿彌陀佛國に往生することを得る。如來は手を授けて頂を摩で、汝怖懼すること莫く我國に來生し、現の身は横死を被らず、鬼神の便を得る所と為らない。

(88a12) 菩薩が大千世界を破る滅罪印第十四。

起立して左手を以って前に向かつて臂を展げ、五指を前に向け散らし、豎に五指を拓く。次に右手の大母指を以って屈して掌中に在り、四指を以って拳を把って右の耳の上に當てる。當に身呪を誦し頭に指が來去する。此の印は日別に三時を須いる。一時に七遍を誦えると、能く五逆四重の罪を滅する。一切の衆生に於いて慈悲心を生ずれば、即ち能く一切の罪根を燒く。此の身滅する後に即ち佛に値うを得て、彼の佛土に於いて轉輪聖王と作るを得るであろう。復

た陀羅尼の名を得て無量無盡藏と曰う。復三昧の名の智等を得る。復た身中の二十八種の相を得る。現の身において眼舌耳鼻等の痛みを患らわず、乃至、身中の一切の疾病悉く能く消滅する。若し先の業の罪の有る者も亦、〔その〕消滅を得る。若し天の早を見る時には、烏麻子（胡麻）を取って稗麻子（唐胡麻）の脂と和し、捻って丸〔薬〕を作り、呪一百八遍を〔唱えよ〕。

湫水¹⁵の中に〔その丸薬を〕擲著す（なげつけ）ると、即ち雨を得て、若し雨が多過ぎるなら、稻穀を取って焼いて灰を作り、蔓菁子^のの脂を取って和して丸を作り、呪之^の一百八遍を〔唱えよ〕。湫水中に擲著すると雨が即ち止むのである。

(88a27) 菩薩が三千大千世界の魔の怨印をする第十五

五指を以って相叉^{くみあ}わせ左に押し右に急に拳^{こぶし}を把り頂上に當てて著ける。

身呪を誦すれば即ち降伏するを得る。若し此の法を作って舍利塔の前に向かって二十九の(88b01)日夜に、白檀香を取って末^{こな}を作って、地に塗って曼荼羅を作り、其の中に種種の花を散らし、澡い浴び清浄な新しい浄衣を着て、手に香爐を把^とって沈水香を燒き面^{おもて}を東に向けて坐り、呪を一千八遍〔唱える〕。此れは是、最初の功能である。又芥子烏麻を取って、一處に著けて擣^ついて末^{こな}と為し、三指を以って少し許り撮取して、之を呪し一遍に火中に擲著^{なげ}けよ。是の如く七日、日別に一百八遍すれば、然る後に作す所は悉く皆成就するであろう。

(88b7) 菩薩廣大無畏印第十六

起立し足を並べ先ず右手を以って、左の肘頭を仰ぎ承^うげ、左手も亦之の如くする。舍利像の前に於いて、身呪を一百八遍誦すれば、即ち無畏施を衆生に於いて得る。又茴香^{ういきょう}・白芥子^{しょうぶ}・昌蒲を取り、多婆利（外國薬名）を捨て此等の物を以って、火中の内^まで之を燒け。火を燒く之時には應に佛前に於いて、或いは淨處に在ってなすべし。呪を三十二遍誦し、香花を以って供養すれば、呪法悉く皆成

15 湫水は中国北方の山西省中央部の山地（山西省興県中段黒呂梁山茶山：一説では白龍山の南麓大坪頭峽山脚下湫水寺）から南南西に下って龍門で黄河に合流する川。全長122km。汶河、秋水、湫水河、臨水等ともいう。百度百科2019 Baidu 参照。この文によって智通が隋唐の時代に山西省に住んでいたことと、その地方の百姓農民の生活を熟知していたことを知る。智通のこの神呪經の原本に、それらの知見を註釈として加えたのであろう。智通譯というこの經は単なる翻譯だけではなく、智通自身の知見を加えたものである。

就するであろう。為す所之者は皆な悉く果を剋^えるであろう。若し餘の呪^{げん}に験が無ければ、此の呪を以って之を呪すれば亦皆成就する。若し夢を欲して乞うなら、此の呪を誦し並びに印と印眼を作れば、即ち夢有って隨所に見ようと欲すれば、皆之を見ることを得るであろう。若し人が福が無く向う所に諧^{かな}わない（適応しない）者も、日に三呪を誦して七日を満ちれば、諸の求める所が有れば、一切皆得るであろう。

爾の時に菩薩は娑竭羅（Sāgara）龍宮の海の會に在って法を説く。諸の龍の衆を見て大きな苦惱を受け、諸の龍の衆を愍^{あわれ}んで苦惱の衆生を度す（救う）為に、悉く苦を離れることを得させ、諸の怨害を無くした。時に龍女は一寶珠を獻^{ため}ずる。價は娑婆世界に直^{あた}する。法を求める為の故に、吾は廣く諸の苦難を離れさせる為に説く。

爾の時水精菩薩、利益を欲し此の呪を護持するが為に、而して呪を説いて曰わく

(88b25) 水精菩薩千眼印呪を護持する第十七。

毘摩隸・摩訶毘摩隸・郁呵隸・摩訶郁呵隸・休摩隸 / *Vimale mahā-vimale, yu hare mahā yu hare*

ノ無垢なるものに、大いに無垢なるものに、ユ・ハレー、大なるユ・ハレー
摩訶休摩隸・薩訶隸。止隸涕・馱婆訶 / *su-māle mahā-su-māle, sa hare cirete svāhā*。ノよき華蔓よ。ノ大きなよき華蔓よ。サ・ハレー。チレーテー。栄えあれ。

若し善男子・善女人有って、在る所に遊び方、此の千眼千臂菩薩を法を受持する者をば、われ當に常に隨って衛護すべし。

乃至、諸間^{しばらく}、眷（88c01）屬の惱亂の無い者に、若し〔或る〕人が急に他國を難じ相い侵し盜賊〔となり〕逆亂するならば、當に五色^{いと}の縷を用い、結びの呪を二十一遍誦えるがよい。

一呪を一結し左臂に於いて繫げ、又左手の無名の指（薬指）と中指と頭指（人指し指）とを以って、拳を把^とり、大母指（親指）の甲の上に、小母指（人指し指）を展べ、賊を指す所の方に呪を七遍誦すれば、悉く皆な退散して害を為すことが能きない。是くの如く七日の日別に一百八遍誦し、然る後に作す所は皆悉く成就しよう。

爾の時、菩薩は雪山中に在って法を説く。夜叉や羅刹や國中の人民を觀見

すると、〔夜叉や羅刹は〕唯、衆生の血・肉を食らい善い心が有ることが無い。菩薩は利益を為そうと欲して方便をもって教化するに、神通力を以て尋ねて彼の國に至って、千眼千臂を現わし魔身を降伏する。成就の結びに姥陀羅尼印を設ける。

爾の時に羅刹國王が、来て我が所に至って哀を求めて頂禮する。我は成就印を以て之に印すると、即ち無上道を成すことを得る。

(88c12) 菩薩成就印第十八

起立して足を並べて合掌を心に當てて、小指を以て相い^{まじわり}又左に右に押す。

身呪二十一遍を誦すれば、種種に皆成就を得る。若し六道に苦惱する衆生を救うには、當に輪印を用い十指の頭を以て各相い^{おのおの}拄える。

腕を開き掌を開いて中を開か^し使め、其の十指の間を各相い去ること一寸許りにすれば、即ち是れ菩薩の六道に在って循環して諸の苦難を度す。此の印を以て轉迴すれば、悉く皆苦を離れることを得る。(此の印の法は拔吒那羅延の長年の師・繞翻^{にようほん}が、便ち即^{すぐ}に國に歸り並びに將に翻ぜんとする所之本を、智通が畢竟尋ね逐うも遇うことを得ず、一僧の邊に於いて梵本を得て譯出した。外には〔その〕本が無かつたのである。)¹⁶

(88c20) 菩薩が等正覺を成ずる印第十九

結加趺坐し、先ず左の手を以て五指を舒べ、掌を仰いで左の膝の上に在る。次に右の手を以て五指を舒べ、手を覆^{おお}って右の膝の上を^お捺す。此れは滅盡の印の法と同じである。過去・未來・現在の諸佛は皆同じく此の印をもって佛の菩提を得る。此の印は能く一切の業障^{ごっしやう}を除く。若し坐禪し諸法が現前せざれば、當に七日七夜、阿練若處^{あれんにや}(人里から遠からず近からぬ疎林の修行場)に於いて、此の陀羅尼並びに此の印法を誦し、至心に佛を念じ晝夜六時に懺悔するならば、即ち諸法の現前するを得ること、及び得る所の福は無量無邊であつて稱計^{しょうけい}す可きではない。

16 この割註には拔吒那羅延の長年の師：繞翻が故國に歸り、智通が翻訳する本を求めて逐うが得ず、西域に旅し或る僧の許で本經の梵本を得たというので、智通と西域との縁を示す。この同文はこの別本にも同文で出ている (T.20. 95b19-21)。

(88c28) 菩薩三十三天を呼召する印第二十

先ず左手の四指を以って拳^{つか}を把む。次に右手を以って左の手の大母(89a01)指(親指)を握り、亦拳を把る如くに、左手の大母指をして、右手の虎口(親指と人さし指とを開き、その間を虎の口のように丸く開いた部分)¹⁷の中に在って頭を出さ令め、右手の頭指(人指し指)を以って來去させる。呪に曰く

唵^ん俱智俱智^二俱耶利^三遮利遮利^四遮梨隸^五蘇婆^{二合}訶^六

su-māle mahā su-māle, sa hare cirete svāhā. /よき華蔓よ。大きなよき華蔓よ。

/それは運ぶ。これらは久しい。栄えあれ。

此の陀羅尼印呪は不可思議で、若し善男子・善女人が眠ろうとする時に臨んで此の呪を一百八遍誦し、心中に願う所を夢に於いて寐中に悉く知見することを得る。若し能く日日に此の呪を誦する者も亦能く一切の罪を滅し菩提心を發し越せば、其の人は昏^{くろ}や夜に寐る夢に漸漸に増廣し皆吉祥を得、乃至夢に如來菩提樹下に在るのを見て成道するという記(予言)を受け、乃至、釋・梵・諸天が常に來て侍衛する。

(89a11) 菩薩天龍八部鬼神を呼召する印 第二十一

起立し足を並べ先ず左手の大母指(親指)を以って屈して掌中に在り、四指をもって拳を把り當に心の上に著くるべし。次に右手を以っても亦、^{かく}之の如くする。右手を以って右耳の邊に在^おき、頭指(人差し指)を以って來去する。呪に曰く南無尼乾陀^一南無阿利闍波陀^二馱婆訶^三Namo Nīlakaṇṭha. /青頸〔觀音〕に帰命。栄えあれ。

南無阿利闍羅馱婆訶^四理醯夷醯馱婆訶^五Namo arcā pāda svāhā.

/帰命。來たれ。來たれ。栄えあれ。

此の呪印を若し善男子・善女人が受持し讀誦するならば、七世の宿命を知り、毒蛇が敢えて螫^ささない。毒薬は自然に除かれる。刀が能く害することができない(不)。王も亦、瞋ることができない。永劫に地獄の苦を受けない。若し此の呪をする時には、二十八部の鬼神が來て詣でる。呪を持ち人の邊において誦^とえると坐して呪を聽いて誦^とえる。若し善男子・善女人が有って、鬼や魅^{ほけもの}の著^なく所と為るなら、白い縷^{いと}を以って呪の索と為し、一遍に一結びしのように

17 全日本空手道一友会本部【基礎講座】基本-攻撃部位

www.ichiyukai.com/lesson/lesson-a.html による。2019.07.19閲覧。

四十九結びして、其の咽下に繋ぐと、其の病は即ち除かれよう。若し國中に災疫流行して國人の死亡が多いなら（者）、當に國の王園の池の中の蓮花一百八莖を取って、一つの花に各呪を一遍し火の中に擲け置き、焼いて蕩盡せ令ると災疫は即ち除かれる。

(89a26) 菩薩解脱印第二十二

結加趺坐して先ず左手の中指を以って、大母指（親指）の頭と與に相捻り、掌を仰いで上に向け、餘の三指を散らして舒べ左の膝の上に置く。次に右手を以っても亦、之の如に手を覆って右の膝の上に置いて、身呪二十一（89b01）遍を誦えると、願う所悉く皆満足し、諸の有る苦惱から悉く皆解脱する。

若し善男子・善女人が、具に十惡・五逆等の罪を造り、閻浮提の地を履う微塵の如くに、一一の微塵が一劫を成すほど、是の人が造る若干等の罪が、應に地獄に墮ち歷劫に苦を受け、永らく出る期が無い是の善男子・善女人が、能く舍利像の前に於いて、白月（上弦の月）の十五日一日一夜に食せず、印を結んで呪を誦え誦ること一百八遍を満たすなら、上の如き諸の罪は悉く皆消滅するであろう。若し消滅しない者は是の處が有ることが無い。（此の印は智通本の上には先には無かった。智通は 源州¹⁸に於いて一婆羅門僧に逢って此の梵本が有るのに遇會う。之を勘えると、更に此の印有って自ら得て受持し大いに功效が有るとは不可思議である。）

(89b9) 菩薩の自在神足印第二十三

起立し先ず左手を以って左の脚の大母指（親指）を握り拳を把る如くにして、次に右手を以って左の手の腕を握り上に背けて、身呪七遍を誦える。千里を進もうと欲しておもわず（不以為）呪を誦えること難き之時に聲を出さ令めること勿かれ。

18 Wiki. en. 等によると、そこはヴェトナムの中北沿海地帯であり、唐初には源州といい、越南河静省と呼ばれた。唐初にはそこまで唐の支配が及んでいたのである。この割註によれば、智通はそこにまでも旅をしていた行動の人でもあった。これには、私は驚く。

(89b13) 菩薩の神變自在印第二十四

先ず左手の大母指（親指）を以って小指の甲の上に捻る。次に右手を以つても亦、之の如くにする。餘の三指は各散^{おののちら}して豎^たてる。腕を合わせ相^あい著^あげ頂上に置く。身呪二十一遍を誦える。皆遊行を得ること自在である（昔、闍賓國に僧闍提^いが有て北天竺に於いて此の梵本を得ることを求め、未だ曾て翻譯せざるものを自ら得て受持し威力が廣大であったが、敢えて流傳はしなかった。智通は此の僧の弟である婆伽の邊に於いて本を得て、法に依って受持し功效は少なくなかったが、唯、世に於いて流行はしなかった。此の本は絶無であつて後の同學にして得たる者は同じ功德を願う。）

(89b24) 千臂觀音菩薩心王印呪請う第二十五

両手で合掌し掌内を虚しくして腕を合わせ、二頭指（親指）を來去させる。咒に曰わく（此の印は是れ第一根本啟請印）

唵阿嚕力帝麗路迦（去夜）毘社（時賀）Om, āloḥik trailokya-vijaya-sarva-śātru-pramardana-karāya

／左様。アーローリク（觀音よ）。三界を

／征服し一切の敵を制圧するため、

耶薩場尺睹嚩^{二合}鉢羅^{二合}麼駄那迦羅耶泮洋莎訶 hūṃ phaṭ svāhā

／フーム・パット、榮えあれ。

爾^その時、觀世音菩薩は佛の説くことを聞き已^おわり歡喜し信受し、禮^なを作して退く。千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經卷下（次に前掲の梵文の神呪41行が続き本麗本終わる）。

6 ベゼクリク窟寺の觀音信仰に関わる智通の伝承

この經には、「千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經序」という難解な序文が冠せられているが、やや後の時代のものであるので、今は触れない。

前節までに見てきたように、この經典には、翻訳者である智通自身が経験し見聞して知りえた來た知見や感慨までも述べている。故郷の河南省の情景や風習、ヴェトナムや西域へ旅をした体験を語っている。自分が翻訳すべき梵本を求めて、長年唐土で教えていた繞翻^{にようほん}がインドに帰るのを尋ね追いかけても遭えなかったが、或る僧の許で、求めていたその梵本を得て訳出した、という（T20, 88c 18-19, 95 b 19-21）。このようにして智通は西域を広く巡り歩いていたのであ

る。「後に終わる所を知らず」と言われた智通が、都統としてベゼクリクで尊崇されたのも、智通がトルファンに縁が深かった証拠なのであろう。

宋の贊寧(919-1002)等の編集した『宋高僧傳』三十巻の、巻第三の譯經篇第一之三には、「唐京師總持寺智通傳」12行(T.50, no.2061, pp.719c12-720a1, Cbetaの頁と行に倣う)がある(以下の括弧内の小文字の部分は筆者による註記)。

「釋智通は、姓が趙という氏である。本は陝州の安邑(河南省:現今の三峡市付近)の人である。隋の大業(605-616 CE)の中に出家・受具し(具足戒を受けて僧侶となり)、後に總持寺に隸名し(所属し)、律行は精明(僧団の戒律に従う行が詳しく明らかであり)、經論に該博で(広く通じている)。幼いときよりよ自りぬきん挺て秀れており、即ち遊方ゆ之志(諸国を行脚する念願)があった。洛京(洛陽)の翻經館いに往くにちな因んで、梵書ならびに〔梵〕語を学んで、曉然(はっきり)と明解した。貞觀(627-649)中に属して北天竺の僧が有って「千臂千眼經」の梵本を齎して到る。〔唐の〕太宗(在位626-649)が敕して、天下の僧中の學解の者を搜し、翻經館の綴文・筆受・證義等に充てる。〔智〕通は其の選に應じて梵僧と〔相〕對して、譯して二巻と成す(T.20, 83b-90a, 96b-103c: 千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經, 序を冠する高麗本 = a 本と、明本を原本とし諸本と校合した b 本とがある)。〔次の〕天皇(高宗)の永徽四(653)年に復た本寺に於いて「千臂千眼觀世音菩薩呪」一卷(T.20, No.1035, 17b-18b), 「觀自在菩薩隨心呪」一卷(T.20, No.1103, 457b11-0463a, ♪經という), 「清淨觀世音菩薩陀羅尼」一卷(T.20, No.1038, 21b-23a, ♪經という)を出して、〔智通の譯は〕共に四部五卷ある。瑜伽祕密教を行じ大いに感通有り、「後に終わる所を知らず」と。

既に触れたが、智通が「觀自在」を冠する經名を採用したとは疑わしい。玄奘帰国(645)以降にも、觀音・觀世音が東洋に今日まで広く行われる。主な訳例は菩提流志(長壽2-開元15: 693-727)譯『千手千眼觀世音菩薩姥陀羅尼身經』(T.20, No.1058, 96b-103c), 伽梵達摩『千手千眼觀世音菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經』(T.20, No.1060, pp.103c-105c), 金剛智(咸亨2-開元29: 671-741)

『千手千眼觀世音菩薩大身呪本』(T.20, No.1061)。但し金剛智には觀自在菩薩を冠する譯經もある。不空(705-)譯『千手千眼觀世音菩薩大悲心陀羅尼』(T.20, No.1064, 117a 以下の挿図等は除く)。不空にも觀自在菩薩を冠する譯經もある。しかし觀自在菩薩は余り信仰の対象にはならなかったようである。以上の觀世音に関しては大東出版社『佛書解説大辭典』第六卷(改訂再版1964)に神林隆淨

師の解説があり、小野玄妙博士著：同大辞典『別巻佛典總論』（改訂再販1991）の「第一部經典傳譯史第六章新譯時代」も参考になる。

筆者は智通に関しては、西域北道トルファン地区のベゼクリクの洞窟寺院にあったという黒衣を纏う3人の佛僧の壁画の大図版を想い浮かべる。そこには向かって右端には「智通都統之像 Čitung Tutung bāg-ning iduq körki：智通都統殿の聖像はこれである」という墨書の帯を頭上に冠している立像である。その左端には法恵都統 Vapgui Tutung, 真ん中が進恵都統 Singuy Tutung である。法恵都統は高昌仙窟寺法恵（5世紀末頃坐亡）であり、進恵都統は未定ながら、前者よりやや早く飢饉に際し自分の身を人々に施そうとした釋法進ではないかと考えたことがあるが確証が乏しい。翻訳僧智通は7世紀に下る。それらの画像は第2次ドイツ探検隊（Albert von Le Coq 隊）が発掘した第9号窟寺の壁画の図版にあった。

ル・コックが壁画を分割し剥ぎ取って梱包し、オアシスを辿り五千五百余メートルのカラコルム峠を越え谷や荒野を越え、ボンベイから海路でベルリンに運び民族学博物館の壁に固定した原画が、第2次世界大戦末の英軍の空爆で焼失した¹⁹。

智通都統が「千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經」の訳者であると証明したのは、森安孝夫博士である。シンコ＝シェリ都統 Singqo Säli Tutung がウイグル語訳した陀羅尼經の識語に、インドの阿闍梨 伽梵達摩（尊法, Bhagavad-dharma, ウイグル語 Kavandrumi）が訳した『千手千眼觀世音菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經』（T.20, no.1057）を第一巻とし、智通三蔵が訳した二巻（『千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經』 T.20, no.1057a, no.1057b）を第二巻と第三巻としてウイグル語訳したという。シンコ＝シェリは『金光明最勝王經』や『大慈恩寺三蔵法師伝』をウイグル語訳した翻訳家で、10世紀末から次世紀前半に活躍したという²⁰。

19 ル・コック著 木下龍也訳『中央アジア秘宝発掘記』（角川文庫1962年、中公文庫2002年）p.121に向かって左から法恵都統・進恵都統・智通都統の肖像がある。

村上真完1984『西域の仏教 ベゼクリク誓願画考』第三文明社、東京；同2017「高昌ベゼクリク窟寺の仏教再考—誓願画等の流布と観音信仰儀礼」『印度学仏教学研究』第65巻第2号, pp. (1)-(8)=1031-1038, 同第65巻第3号, pp.(382)-(383) = 1420-1421

20 森安孝夫1985「チベット文字で書かれたウイグル文仏教教理問答集（P. t.1292）の研究」『大阪大学文学部』pp.56-62. 同2015『東西ウイグルと中央ユーラシア』名古屋大学出版会. Peter Zieme 1976, Singqu Säli Tutung-Übersetzer buddhistischer

伽梵達摩は智通とも年代が近く、千手千眼観世音菩薩を冠する経の訳者であることは既に見た。

From Avalokita-svara (觀音, 觀世音) to Avalokiteśvara (觀自在)
 千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經 translated by 智通

Shinkan MURAKAMI

In early Tang (唐), a Buddhist Monk: 大唐總持寺沙門智通 (武德·貞觀年618-49, CE.) translated this sūtra (T. No. 1057, pp. 83b-90 : Kao-Li Edition: 麗本 ; pp. 90a-96b, cf. Ming Edition: 明本) . I translated the former, because it contains Sanskrit 智通譯「千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經」 in Character: Siddham. 智通 uses always 觀世音 and never uses 觀自在, though in the Sanskrit (Siddham) text uses Avalokiteśvara always. That means 觀世音 (*Guānshìyīn*) or 觀音 (*Guānyīn* or *Guan Yin*) is very popular but 觀自在 (*Guanzizai*) was not known yet. 玄奘 (Xuanzang, Hsüan-tsang 600?- 664) adopted 觀自在 afterward in his great journey (625-645) at the Swat Valley. After his time 觀自在 became also known widely in Chinese and Eastern Asian Countries, but in reality the worship of 觀世音 and 觀音 has been more famous in these countries until nowadays.

Contents

- 0 Studies and Problems on Guanyin or Guan Yin.
- 1 Chinese Equivalents of Guanyin and Guan Yin.
- 2 Home lands of Guanyin and *Guanzizai*.
 - a Xuanzang (玄奘) worshipped Guanyin at his first difficult journey for lack of water in the dry vast Gobi desert.
 - b But Xuanzang knew that in Sanskrit *Guanzizai* is right in travelling at the Swat Valley.
- 3 Introduction to the 千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經
- 4 Dhāraṇī in the same 千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經
- 5 Japanese Translation and Explanation of 千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經
- 6 Chinese Preface to 千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經
- 7 The Legend of 智通 must be concerned with Guanyin-worship in the cave temples at Bezeklik in Turfan District in East Turkestan. He was there worshipped as 智通都統 : Čitung Tutung. The first (left) is 法惠都統 Vapgui Tutung who was 法惠 of 仙窟寺 in 高昌 died in sitting, near at the end of fifth century. The Middle: 進惠都統 Singuy Tutung is not certain, but I think he must be 釋法進 who wanted to give his body to hungry people in early fifth century though uncertain. The right is 智通都統 who wanted to get manuscripts of Guanyin, traveled in East Turkestan, and got handwritten manuscripts of Guanyin from some monk.